

香川クラブ報



NO182
5.54.6.15

社団法人 日本アマチュア無線連盟香川クラブ

お 知 ら せ

- 7月のミーティングを下記のとおり実施します。

実施月日 7月1日(日) 13時から

場 所 大の場健康体育センター 第3会議室

- 電話級アマチュア無線技士受講生募集について（短縮コース）

主 催：J A R L

日本アマチュア無線連盟では、電話級アマチュア無線技士の資格のとれる短縮コースの講習会を次の要領で開きます。

＜日 時＞ S 5 4 年 1 0 月 2 0 日（土）～2 8 日（日）

日曜日は昼間、その他は夜5：50～9：00まで

(注) 郵政省認定講習の為欠席は認められません。

＜場 所＞ 高松市民文化センター 集会室

＜資格＞ 短縮コースの為、選抜テストに合格した方に限り受講
出来ます。

＜選抜テスト＞ S 5 4 年 8 月 2 6 日 (日) 午後

＜場 所＞ 高松市民文化センター 集会室

＜選抜受験料＞ ￥1,000円（2科目）

＜申込方法＞ 高松市の電化センター（TEL 62-6077）、野田屋

(TEL51-4582), ハムショップ高松 (TEL62-

1991)に申込み用紙があります。

＜選抜テスト募集人員＞ 160名（定員に達し次第締め切ります）

詳しくは日本アマチュア無線連盟四国地方事務局 TEL (0899)

43-3784, 又は香川県連絡所

越智

繁彬までお問合せ下さい。

サラリーマン生活余談

J A 5 M N Y 竹仲 善孝

仲のよい間なら「馬鹿」「この野郎」でも喧嘩にならない。心が通っているからだ。よく知り合わぬうちは腹の探り合いとなる。仲よくなってしまうことが第一だ。そのためには理屈を後回しにして、同僚のよさを探し褒めたたえることだ。ライバル意識だけを燃やし、少しの失敗、わずかな欠点、少々の誤りを取り上げ、仮借なき追及で息の根をとめて“どうだ勝った”と思うほど恨みを買うことはない。長所もあり、欠点もあるのが人間だ。長所を認めて素直に感心できる人間が友をつくる。相手に自分と同じ長所を認めたら、同士として話し合えるだろう。自分にはない長所を認めたら、教えを請えばいい。その素直さが同僚の心を和らげ、ライバル意識より、友情を生み育てる。これはハムの仲間にも共通しているのではないだろうか。

フィールド ミート は

2001 博見学会へ!!

54年4月29日(日)08:50 宇高フェリー乗船場へ濃紺色のブルーバードU スーパーサルーンがブレーキの音も無く、静かに停車し、運転台より長身のJ A 5 M N Y局が力強く降りて来た。助手席よりJ A 5 X I B局がにこやかにM N Y局を頼もしげに見上げながら寄りそう。後部座席よりセカンドさんが2名、楽しそうに降り立つ。

さあ、香川クラブのフィールド ミートだ。楽しい旅の出発の時刻が刻々と迫っている。

AM 9:30 クラブ員1名、家族3名、全員集合 異常無し。

さあ、乗船だ、一路フェリーは宇野港に向って波静かな瀬戸内海を突き進む……………。

ある傍観者の寝言より

屋島寺の思い出

JA5RYG 石川 茂男

198×年7月20日日曜日、浪速秀夫君は、お父さんの邦彦氏に連れられて高松に来ていた。秀夫君は大阪府立城内高等学校の二年生である。秀夫君は、科学が大好きで、科学なら物理、化学、生物、地学、何でも大好きで、特に、電気の実験と生物の解剖は大好きである。城内高校三階科学部電気クラブの部室で、1メートル82センチ、86キロのものでっかい体が前かがみになって半導体の半田づけをしていたら、それは多分秀夫君だろう。「アッチッチ、またやった。」といって自分の手をふうふうと吹いていたら間違いなく、それは秀夫君だ。あわてん坊で、少しおっちょこちょいの秀夫君が半導体に半田づけするのを間違って、自分の指に半田づけして、水ぶくれをこしらえたのだ。あわてん坊で、少しおっちょこちょいだが、ユーモアがあって、クラスの人気者である。但し、成績はクラスの、中の上ぐらいであった。

秀夫君のお父さん、邦彦氏は、豊中市野田にある私立島内中学校の社会科の先生である。邦彦氏は、日本各地の古い民話や史蹟を調べるのが趣味で、それで秀夫君をつれて、四国高松の屋島に来ていた。秀夫君は、2学期の学期末試験が終り、ほっと一息ついたところへ、お父さんからのさそいがあったのでついてきたのだった。お父さんは、秀夫君に車の修理をさせるつもりでいた。邦彦氏の自動車は、中古車で相当ガタが来ていて、よく故障した。秀夫君は、お父さんのそのような思惑と別に、自作の無線機をテストができると張切っていた。秀夫君は、中学1年生の春に、電話級アマチュア無線技士の国家試験に合格し、高校1年の秋には、一級アマチュア無線技士の国家試験に合格した、全国的にみて数少ない高校生一アマである。しかも、無線

機（リグ）の自作派である。勉強しろ、勉強しろ、というお父さんには内緒で、2年になってからすぐに2.3ギガヘルツの無線機を作り始め、やっと、学期末試験の始まる前日に完成したのだった。そのために、指先を14, 5ヶ所も半田づけして、水ぶくれを作ったし、漢文と、世界史の成績がクラスの平均以下に下がったようだった。でも、2.3ギガの無線機を完成した喜びは、成績の低下を補って余りがあった。試験中は、さすがに無線機のテストを遠慮したが、試験が7月17日に終わると、早速、同じ城内高校電気クラブの友達、小沢君と電波の飛びぐあいをテストしてみた。同じ府内では、音質もよく、雑音もなく、信号強度も十分で、漢文と世界史の成績の低いのに反し、試作無線機の成績は上々だった。だが自作無線機で、電波がどこまで飛んでくれるかわ疑問だった。そこへ、お父さんからの四国屋島行のさそいである。待ってました。無線機のテストには、願ってもないことだ。お父さんが、自動車の修理係を申しつけたのも苦にならなかった。大阪を出てから、四国へ来るまでに、車は何度かエンコしたが、秀夫君の技術で何とか修理して、屋島にやって来た。お父さんと秀夫君は、ドライブウエーを上り、屋島山上の駐車場に車を止め、屋島寺を訪れた。屋島寺は四国八十五番の札所である。だが、お父さんも秀夫君も、お寺参りが目的でないので、お賽銭を上げて、形ばかりの参詣をすますと、寺務所へ行き、納経料、供物料を納めて、住職へ面会を求めた。過分の供物料が効いたのだろうか、小坊主が2人を、長い廊下を通して、広い客間に案内してくれた。立派な床の間があり、見事な掛軸がかかっていた。お父さんは、客間を見まわして、ふむふむとうなづいていたが、秀夫君には、古めいていて、年寄のありがたがる骨董品を見る思いがしていた。障子があくと、年寄りの和尚さんが静かに入って来ました。初体面の挨拶がすむと、お父さんは、早速、屋島の古い民話をお話願いた

いと頼んでいました。

和尚さんは、こんな話しは民話になるかどうかわかりませんが、と前置してから、話をしてくれました。

「この屋島寺に、狸が住んでいましてね。」と頭がつるつるの和尚さんは、お茶を飲みながら、ぼつぼつ話し始めた。「昔から狸は、よく人を化かすといわれています。この屋島寺に住んでいた狸も、それはうまいものです。」と和尚さんはまるで、狸が化けるのを見てきたように話しをする。秀夫君もいつの間にかお父さんと一緒になって、話に聞きいっていました。「この屋島寺に住む狸は、名を太三郎狸といいましてね。その人品、骨格いやしからず、いや人品じゃなく、狸品でしょうか、あはっ、はっ。」お父さんも思わずつり込まれて笑い出していた。「何といいますか、狸の面がまえですな。そんじょ、そこいらにいる、かけ出しの狸よりは、違ったものがありましてな。」

「頭のとっぺんに、白い毛が丸く生えとっての、それが、まるで、冠をつけたようなんじゃ。」和尚さんは、自分の話に熱が入っていつの間にか、讃岐の方言がはいり出したが、自分でも気がつかないらしい。「狸も年をとって、自由自在に化けられるようになったら、しっぽの先に白い毛が生えてくるんじゃ。ほいでも、頭のとっぺんに白い毛が生えてくるのは、それから何年も何年もたってからでう。」「まあ人間でいうと、文化勲章をもらった人が百歳を過ぎて初めてかぶれる帽子のようなもんでう。」「太三郎狸は、頭の白い毛も自慢しとったが、それ以上のがあってのう。それは、手足に、いや狸じゃから四つ足かのう、その四つ足の先の方に金色の毛が腕輪のように生えとってのう。これは、太三郎狸の生れつきだけど、太三郎狸にしかないの、よう自慢しとったわい。」住職さんがあまりにも太三郎狸のことを詳しく、さも毎日会っているかのように話をするので秀夫君は、「和尚さんは、

太三郎狸に会ったことがあるのですか。」と尋ねた。すると住職さんは、ちょっと間をおいて 遠くを見つめるような感じで、「うーん、それは、かれこれ50年も前になりますかな。私が31歳でこの寺の住職になった時のことじゃ。」住職さんの話はだいぶ古い。「私が、ここの住職を継いだ時、丁度、新築中の宝物館が落成したんで、あれやこれやのお祝いを兼ねて、四月の八日、つまり灌仏会かんぶつえの日（お釈迦さんの誕生日）に、組内の寺の住職さん、檀家総代さんなどをよんで、昼すぎから一杯やってのう。」住職さんは、テーブルの上のお茶のコップをとって、口元に持ってゆき、あたかも盃からお酒を飲むような仕草をした。この住職さんは、お酒が好らしい。「私も、その日はほんとによく飲みました。組内の住職さんに勧められ、大工の棟梁さんに勧められ、檀家総代さんに勧められ、ほんとに、よく飲みました。それに加えて、お祝いの準備に、ここ数日の徹夜の疲れも出てきて、さすがの私も、夕方頃には酔っぱらって、とうとう寝てしまいました。」「夜中の何時頃でしょうか、昼すぎから飲んだ酒のせいか、ひどく喉がかわいて、目がさめました。私は酔いぎめの水でも飲んでこようかなと思って、布団の上に起き上がりますと、何やら黒いものが、布団の裾の方にうづくまっています。」始めの方は、私も寝ばけていますし、酔もいくらか残っていたのか、はっきり判らなかったので、小坊主でも寝ているのかなと思ったのですが、だんだんに目がさめてきてじっと見ていると、その黒いものが動きました。私は、一体何だろうかと思って、庭の方からさしこんでくる月光りに目をこらしてよく見ると、それは、何と、狸ではありませんか、ほんとにびっくりしました。その狸は、私が目を醒ますのをそこでじっと待っていたのでしょうか、「和尚さん、お目ざめでしょうか。」と言ったのには、私も二度びっくり、水がほしいのも忘れて、腰を抜かさんばかりでした。（乞う!!次号御期待）

社団法人 日本アマチュア無線連盟

香 川 ク ラ ブ 報

発行責任者	JA5MQ	稲毛	章
編集者	JA5IKJ	青木	俊士
〃	JA5IRP	人見	和郎
〃	JA5PZL	高畑	康男
連絡事務所	761-01 高松市高松町		

清川 隆美 (JA5KWF)